特別
へ12
5117

舟橋俊相賢朝臣家

へ12
5117

源氏目録

一 桐壺
二 帚木 并空蟬 夕顔
三 若紫 并末摘花
四 紅葉賀
五 花宴
六 葵
七 榊

八 花菱星
九 須磨
十 明石
十一 澪標 并 蓬生 閑屋
十二 繪合
十三 松風
十四 薄雲
十五 槿

十六 乙女
十七 玉鬘 并 物語 小蝶 螢 常夏 篝火
十八 梅枝 胡蝶 御幸 藤袴 真木柱
十九 藤裏葉
二十 若菜 上下
二十一 柏木
二十二 横笛 并 鈴虫
二十三 夕霧

二十四 御法
二十五 幻
二十六 雲隱
二十七 匂宮 英藤 竹川

宇治十帖

一 橋姫
二 椎の本
三 総角
四 早蕨
五 宿木
六 東屋
七 浮舟
八 蜻蛉
九 手習
十 夢浮橋

桐更衣

桐壺

源氏十二三ノ比元服アリ世ノ人ノ心ヒトリ
女メカレソヒフシトフレハ蓬ノ下ノ人

帝　更衣ノ母ノ使

ユヘイ命婦　更衣ノ母ニアヒヨメル

母ノ方

月　帝ノ女

帝

月

太上天皇

葵の上左大臣

いとけなきたちのひとをもかなしとおもへどこのつや
ひとりこそ
ねんしたまへ

右ノ方

女

はるさめ　源氏ハ三十二ト書ケリ　ハ三十二歳ノ春サクラメト云フアリ

うきねをしたまへるかなしさにこそ
ものをおもふ

右上人

女

ねぶれ
ものをおもふ

以中将

葵ノ上死ナリ　中ノ小方ハ右大ノ四ノ君トアリ

こかしこにあるものをとりあつめてこのはるのあさ
山賤のかきねにあるこのはるのあさ

以中

女

咲まさりぬ花ハ散ぬとわりなくもなくとなつまちとりあ
うちはらへ雨とふけばとこなつの花ハ

右ノ方

女

ちるこのはるのあさ
ちるこのはるのあさ

源氏

毎年の春ハ
毎年の春ハ

イヨノ守ノ女　小方

はるのうらゝにあるこのはるのあさ
はるのうらゝにあるこのはるのあさ

源

みし夜とあけぬるものとなけれども
みし夜とあけぬるものとなけれども

月

はるのあさ
はるのあさ

女々

[illegible]

源

空

イヨノ寺小方く

[illegible]

夕月　源氏十六ノ夏ヨリ十月三ノ十日ノ見タリ

女

夕月く三位ノ中将トトモニ人ノ子ノ心ヲ試シ給ヒ

[illegible]

源々

[illegible]

源

[illegible]

中将君

六条院ノ長所人

[illegible]

源

女

源

女君

源

女

源

[illegible]

空　源　源　伊勢守女々　源　源　源　空々　源

源氏十七歳

尼君　お乳母三君　源　尼々　源　侍従　源

信
重
源
尼公
源
源
尼や
源
尼や

源
茂重
源
尼君
源
源
少納言や
源
女うさ人ども

源　笠

[illegible]

未詳

源　[illegible]

源　[illegible]

小紫式部　作者の乳母子

源　[illegible]

源　[illegible]

未詳　[illegible]

源　[illegible]

源　[illegible]

未詳　[illegible]

源　[illegible]

源　[illegible]

未詳　[illegible]

源　[illegible]

源　[illegible]

未詳　[illegible]

源

[illegible]花てあやなくうとき海ゝ梅さくらなどいとうつ生れと

[illegible]久　源氏十七ノ十月ヨリ明年七月ニミノアリ

源

[illegible]

友達々

[illegible]人の神つかひとなりたるもうしん[illegible]

源

[illegible]

日合物々

[illegible]

源

[illegible]

友達

[illegible]

源門侍分

[illegible]二人[illegible]

源々

[illegible]

内侍

[illegible]

源

[illegible]

源平

[illegible]

源々

[illegible]

内侍

[illegible]

源々

[illegible]

源

節

源

中宮

源

朧月

源

源

朧月

有明君トモ云 右大ト六ノ君

源

源

朧月

朧月ノ父 二条大殿トモ

右大臣

源

朧月

六条院御書所

源

笠上殿ソキノトキ

笠

源氏十九 玉鬘 ほの三位ノ

花たちばな

大ぶにぶ姿とうつくしげなれば

海きよりも

入日もなかなか思ひ出でられ

うきみ世をやうやう海

いたづらに家ぬしなくなりぬる

在にたちぬれ有明月のいと

人ぬ海とうちけぶりたる

あつまうち海のうつくしげ

新しきとうち川の

たちうきちいろの底の

あつまうち

朱雀院即位源氏二十三ノ十月

ぬ海

ぬ海

ぬ海

内侍

原

内侍又

内侍ノ局ノ

原

蔡上モノ

原

門

内侍

原

原

大宮蔡上ノ母

門

原

檀君

人の世と思ひ給へ侍りしに、神と思ひて侍る

と侍りしかば、

あはれ世にはなれたる

あはれとも思ひ給へ

みし人は

第五の宮

とかやの

とも思ひ給へ

神とぞ

物思ひに

源
なき玉そいとゝかなしきねし床のあくかれかたき心ならひに

同
君なくてちりつもりぬるとこなつの露うちはらひいく夜ねぬらん

同
是ハ後朝ナリ此ニ新枕とあり
あやなくもへたてける哉夜をかさねさすかになれし中の衣を

同
あまた年けふあらためし色衣きては涙そふるこゝちする

大宮
あたらしき年ともいはすふる物ハふりぬる人の涙なりけり

さかき

源氏二十二ノ九月ヨリ二十四ノ夏ニテアリ

御息所
神垣ハしるしの杉もなき物をいかにまかへておれるさかきそ

源
少女子かあたりと思へハ榊葉の香をなつかしみとめてこそおれ

源
暁のわかれハいつも露けきをこハ世にしらぬ秋の空哉

御息所也
大かたの秋の別もかなしきに鳴音なそへそ野への松虫

源
八洲もる国つ御神も心あらハあかぬ別の中をことはれ

斎宮也
国つ神空にことはる中ならハなほさりことをまつやたゝさむ

御息所
そのかみをけふハかけしと忍ふれと心のうちに物そかなしき

源
ふりすてゝけふハ行とも鈴鹿川八十瀬の波に袖はぬれしや

御息所
鈴鹿川八十瀬の波にぬれぬれす伊勢まて誰かおもひおこせむ

源
行方をなかめもやらん此秋ハ逢坂山を霧なへたてそ

[illegible]

原

[illegible]

[illegible]

原

[illegible]

内

[illegible]

原

[illegible]

原

[illegible]

原

[illegible]

[illegible]

原

[illegible]

[illegible]

原

[illegible]

[illegible]

原

[illegible]

[illegible]

原

[illegible]

藤　なからふるほとハうけれとゆきめくりけふハその世にあふ心ちして

源　月のすむ雲井をかけてしたふともこのよのやみになをやまとはむ

藤（入道ノ宮）　おほかたのうきにつけてハいとへともいつかこの世をそむきはつへき

源　なかめかるあまのすみかと見るからにまつしほたるゝ松か浦島

藤　ありし世のなこりたになき浦島に立よる波のめつらしきかな

頭　それもかとけさひらけたる初花におとらぬ君かにほひをそ見る

源　時ならてけさ咲花ハ夏の雨にしほれにけらしにほふほとなく

花ちる里

源氏廿五ノ五月ノコトアリ

源　をちかへりえそしのはれぬ郭公ほのかたらひし宿のかきねに

詠せらし女　郭公こととふ声ハそれなれとあなおほつかな五月雨の空

源　橘の香をなつかしみ郭公花ちる里をたつねてそとふ

花散里ハ麗景殿ノ妹　六条院夏ノ御方　人めなく荒たる宿ハ橘の花こそ軒のつまとなりけれ

須磨

源氏廿六ノ三月ヨリ次ノ年三月

源　鳥部山もえし煙もまかふやと海士のしほやく浦見にそゆく

大宮へし　なき人のわかれやいとゝへたゝらむ煙となりし雲井ならては

源　身ハかくてさすらへぬとも君かあたりさらぬかゝみのかけハはなれし

笠

花の宴

原

原

騰々

原

友

原々

友近世義人

原

門

門

春宮

門

春宮イトケナクヨハヒシレタル

原

笠

原

門

うき世といとそそるうつゝ物人名と世の神よりまさ世
ものきかあやいたるうんうきなる月と世ことれ
いたりて春宮の花と月ときうしなるこゝろ
咲ることなく花ハもれたり春ハ花の枝を立ゆる人よ
いまの世ものとおもふて思ふ気と人よりかゝりけるふ
おしかゝ命にはくめぬるとおもふ世ふてこゝ
ものゝ名と孫宮人わしもまつ世ものを
なとと宮ものゝ春ハ花ものゝ言ゆ

原 苔莚

門 勝月

原 苔

勝 苔

苔 スヨリノ ウラ ナリ ニナシ

原 苔所

門

原 苔

原 苔

海の底し秋の中に志ほるゝ浦の磯

原 苔

門

原 苔 苔

原 苔 苔

原 苔 苔

原 苔

源　うしとみしこひしき物はおもひ出の中に左大臣ともにかはらぬ袖ぬれ

源　大弐三位　かし
雅風吹まよふ浦のみをつくしみるめかりける君しのふや

源　人おもひて乃みの緒の絶るさへ打よせてやかぬる涙哉

門　山賤の庵のうちにおもふは悲しき事といふへき里人

門　いにしへの雲ゐに家してかなしき月のよるの事しるき

門　なれゆく人にむかしの暁ゆくひとりねの床しるやとそ

門　いはたて大空の月の夜はきに桜かさしのかきにかけ

門　あひそめしはしまつのあかつきにかゝる浦かけのくさの下

宰相中将　あらたまに春のとし世をたつなき花のきみやあまのかこ

源　雲のうへとひの雨露しけきみに我はむかしの思ひ出にき

以　我やまさきはの雲井にひとりのみなけきてくらしたる春の思ひ出つ

源　志かすかの浦の海原になれきて一むかしのみ物は乱れき

門　八百万神も知るらんかみよりつくるけふのなかれなれ

あり

源氏廿六ノ三月ヨリ廿七ニナリ
廿二年二百九ハサレテ持大納言ニ二十リカ

歟　浦風やいたく吹らんみやこ袖さへぬれし浪の音なきころ

源　海よ海すさのかたきにかゝるほとなき思ひをかけしたにはすむ

原　笠々
遠山色こそ
原
あるかなきの法師の
合　稿ニ書ク
ひとり移る
原
門　明石ニ
合　明石ニ
なるしんの
原
明石ニ
いかせくもんなるやしぶやいなとこそ
原
ふるんのほとやなくいかりまこそ

原
秋の月毛の
門
明石ニ
明石ニ
原
笠々
原
原
明石ニ
明石ニ

源　門　明石　入道　源　入道　源　門

逢ふまてのかたみにちきる中のをのしらへはことにかはらさらなん
うち捨て立も悲しき浦波のなこりいかにと思ひやる哉
年へつる苫やも荒てうき波のかへる方にや身をたくへまし
（源氏ヘ入道ノ旅装束ヲ送ル）
よる波にたちかさねたる旅衣しほとけしとや人のいとはん
かたみにそかふへかりけるあふことの日かすへたてむ中の衣を
世をうみにこゝらしほしむ身となりて猶この岸をえこそはなれね
都出し春のなけきにおとらめや年ふる浦を別ぬる秋
わたつ海にしつみうらふれひるのこのあしたゝさりし年はへにけり

朱雀院
宮はしらめくりあひける時しあれは別し春のうらみのこすな

源　明石へ
歎きつゝ明石の浦に朝霧のたつやと人をおもひやる哉

五節
須磨の浦に心をよせし舟人のやかてくたせる袖をみせはや

源
かへりてはかことやせましよせたりしなこりに袖のひかたかりしを

みをつくし

源氏廿七明石ヨリ此巻ノ年ヨリ次ニ年廿八十一月ニテアリ
内大臣ニナリ玉フ

源
かねてよりへたてぬ中とならはねと別はおしき物にそありける

乳母　明石ノ乳母
うちつけの別をおしむかことにておもはん方にしたひやはせぬ

源
いつしかも袖うちかけむをとめ子か世をへてなつる岩のおひさき

明石上　ひかりくもるハ神の社にはあらはれけむかしこき

宗　天子もちかひくかしこあるハ家に輝出ことしかし

源　雅なる世を海にいたりけむ是も安濃まて事しみえて

源　うき松やとはれてきぬ気色の雲の行末やみえいたりて

明石也　数ならぬ身を三嶋の石に鳴田霧ともしていはふ人のさき

花散　水鶏たたくおとのかすかなりハいかにして逢事を霧の月を今はし

源　そしてたくみも水鶏におとろかすへき夢をはらむ月もすれ

惟光　住吉の松をそ拙ハ見しけむ神代のほとはかけておりへハ　逢

源　あまかりし波のまくらにハ住吉の社とハかけしくもれやはら

門　君をもみてしこの道にて海くしあるの道ある之にハ涼しけれ

明　数ならぬ身を雑波の年もかはらきにすみて流して心知

門　家をまもれむかしの御世の猶とりわけて名をハかけし

源　[illegible]道ひかる事かはき人のあまたかりぬへき前に出て

故宮よりし　御息所中将ニカクシ宮

秋好中宮上之　消かくにかれをかれきかむとし寂すれはおもひの世

よもきふ　源氏廿七八ノ十アリ

末　年かはりしき袖をおもしかへて思ひし事にかけてられかる

篠　ハメノト子
玉かつらかけて宮しかたのかしき風祢もかけて松一竿

末　なき人をこふる夜の袖の上にあまたなみたの思ひそふ

源　鳥すこし都をこそあはれと思へ涼しさよのきぬもの心を

門　夜須の村さめかくみえつつ八松をそ宿れとふり時雨

末　うしや旅くもつきすなき宿をと花の便りにと思ひけり

せ二き屋

源氏十八九月晦日石山詣ノアリ

市中　きりとてせきこえかね花濃やせきに逢坂と人すくなく

源　わくらはに逢ふ人を千尋しも行かなしや堰の思海

市中　逢坂なれや行あふせきをしれは中を行くらん

絵あはせ

源氏二十三月ノ時入元九ノ了不見

朱　おほつかな小松をかけよ八重けき中と祢やいさめ　梅壺秋好中宮ト云

祢之文　まつこえて遠山かけし一文字ともに今日そわかるき

笠　独りめくなにわたは海風とも初まそそみつくゆる

源　うきめみし夏のつらしさ海の色とはにかえる涙か　斎宮女御　弘文式部

平内侍　伊勢の海ふかき心を千尋とも浪そ袖やまつき　大弐内侍　コウキ大女御方

霧風の上にしのはるものに子らの風を立るかは寄る

典侍　みるめこそうらふりぬらめ年へにし伊勢をのあまの名をやしづめん

朱雀院　身こそかくしめのほかなれそのかみの心のうちをわすれしもせず

秋好中宮　しめのうちは昔にあらぬ心ちして神代のことも今ぞこひしき

まつ風

源氏卅一歳ノ事アリ

入道　ゆくさきをはるかにいのるわかれぢにたえぬは老の涙なりけり

尼君　諸ともに都はいできこのたびやひとり野中のみちにまどはん

明石上　いきて又あひ見む事をいつとてかかぎりもしらぬ世をばたのまむ

尼君又　かの岸に心よりにしあま舟のそむきしかたにこぎかへるかな

明石上　いくかへり行かふ秋をすごしつゝうき木にのりて我かへるらん

尼君　身をかへてひとりかへれる山里にきゝしにゝたる松風ぞ吹

明石上　古さとにみし世の友を恋わびてさへづる事を誰か分らん

尼君　住なれし人はかへりてたどれども清水ぞ宿のあるじがほなる

源　いさらゐははやくの事もわすれじをもとのあるじや面がはりせる

同　契りしにかはらぬことのしらべにて絶ぬ心のほどはしりきや

明石上　かはらじと契りし事をたのみにて松のひゞきにねをそへしかな

冷泉院　月のすむかはのをちなる里なれはかつらのかげはのどけかるらん

原

門

乃中

右大弁

宮内卿

明石上

姫君母

明石上

うすこう　保元三年ヨリ廿二ノ巻三ツノ下アリ

宮原をみしの原はしたなくなりて

宮ゐるき去年のしをりのあやな

まとゐき二条殿よりうせ給きうけとる

原

紫上

原

原

門

原　左衛門ヲ高倉女院ヨリ大臣ニ申ニカリしるふ

入日さす岩屋の山の人知れぬ

ものとてこそ思ひ入れぬれ

明石

原

いさわたり知らぬ世界の

海ちかき岩屋の山を

あさ月　保元三年十二月日ノ冬ノ末三ツアリ

原 人丸の神の御しるしにてら雄西世とし(?)く以ふ

弁乗 権 あくて世の数々をとふかひにちらふとも神やしるらむ

原 見えしかりの御寄りもすま思ふ所の花の盛ハるやとぶらん

文々し 秋はてゝ霜のふるきにしもとほまあつかなきられつ権

原 いつの月にのきのなくしんの道に宮柳の里をかねらん

源雨行 年ふけて二本の鶯のちそまちまちておや人の親とならし一を

原 身をおもふ嫁も鴻もよ世にふくれとまするに側れるやと

門 清いさゝもおもにたらぬ人のれつるきにえふくつかれ

又要院 あるかくなにかかはらむ今の上にかはらぬとさしんいらんと

篁 氷ともちいさ上の名八りなくやこゝろにとしも月の影をうるま

原 ノかすはかくして青きのよき雪しせたり数とつらふかはれうらす

門 無くお梅花のきえの数よしなほけまとるら名の絶さ

門 るさ人をまてゝかんり浦世くしかけと思の沫ややまとふむ

花とめ 慶安年二ノ三月ヨリ武也ノ十月二十アリ
此一キ二太政大臣二十リ多

原 かけさやいなほを秋波も立世の君のこときれ昔らん金の杖を

権大々し 菊数すし此白もおすふい子のとし年枚はりかの母を

久方

久方

久方

久方 歌内行ニ

原

女子し神にしまして

久方 惟喜ノ親王ノ歌内行ト云

原

宮ぬしの

宮ぬしの 惟喜

今宮殿内記云

秋好

竹ヒ上ヤ

姫 メノトコ

原

妹

大夫陸

源

兵ゝ々お郎娘ヲテキト云

うき船とこそ思ひしかど

玉

撃久保ノ字ヲルリ君ト云

いちはやみ思ひ沼の水ぬるむ

玉

大道

うきも無い船のさすらひきぬなりさすらひ

二ぢ社の立ぬ社の古川の（ホ）君と寄りや

神垣ゆかぬ社なりけれ

源

玉ヶ

枝なる思ひやる武蔵の国の筑波ね

源

恋ひ沼の水ぬるむ

義

玉鬘、形の筑波ね

源

ヶ

ひとりぬる夜半ぬる神の

源

生上

今氷解の水ぬるむ

ひとりぬる夜半ぬる神の

明ス上

明帖ス

明ス

原

年月を経りしひまてゝ物ゝよりまさりて
引うれ年ゝ忘れ難き
つゝやなれ祝てに本為て花をとるこゝ
なれ春の木まを分きくらのはてゝ思花をとる

ここてゝ

舟中女房ヨリクヨメル詩

風吹波花を見てそ春山吹はきき
春花舞井川の水に吹てこそ見
舞人の心に移ちに老と思ふ家に

原

玉

原

笠

落ち

梅木

世

原

春山吹はうらにはてゝ物無ふらはれ花をくしたれ
笠はしのゝ人と春ゝ迄、物ちに男なけ年名ゝ行き
別男とたゝ春やとさ春花はうとゝ立てゝ
花園はこてゝとちやで年に秋まつ
こてゝ物ちを年ゝ人ありてゝ山吹はゝ
男ゝと春ゝ迄ゝ別れ年ゝ春ゝ
ま春門に相沖ゝ物ゝ春ゝ
ところに、ゝなゝ行れ別れ初をゝ春

原　玉　玉響

[illegible]

原　玉響　玉　宣　玉

[illegible]

花宣　原　門　玉響　原　玉

[illegible]

[illegible]

近江君　内大臣の今姫君

[illegible]

中納言家持　つうきてう毎月の宴

きよ潟なる礒の浦より波立出て名高の松

（けさうりこん不ヱスト云）

原　かりの火

玉　かりの火よ立もてゝ世世はさて世世はの月れ

玉　月出れき雲に雲もてよかりの火れ雲にて雲と雲ハ

原　のまさき

明石上

大ふに松きれ雲ふ雲れ月の言もうさ男ひとつまこと花て

玉　吹乱れ雲れの雲きに女房ふ志はてゝ雲きん花をすま

原　下雲にかりしうまりう女房ふひかきれ月ハ志りゝまり

久方　中将若下云

月さはきしゝ雲海ふ雲りしふりて志ふりて月ハ雲

原　こゆき

谷泉院御製

雲海ふ小塩れよりあやきれ雲きに雲ハ雲ふ

原　小塩よりあやきにりまふ松原にりけりなる雲なる

玉　うしきゝ物雲ゝみ雲ハ雲ふ雲れりゝ

原　あふ雲ひふ雲にりあをなゝくあやきに雲ふ雲

大宮　うふふに雲れて月雲ふ雲ふ雲ハ雲ハ

夫　雲力ゝゝうゝみふまりれゝ雲ハ雲ふれゝ雲ハ

原

内大臣

原

久方

玉

山三条ノ内侍カミニナリ給

柳木

内大臣ノ御子

玉

三条ノ大臣ノ山ニキニカクレシ歌

玉

蜻蛉

石大将

蛍兵部卿

玉

花宴衛門督

玉

笠上ノ衛尉

玉

蛍

まきばしら

原

玉

賢木

玉

玉之君
梅里志

梅里船君　桂枝君ト云　蛍兵ヲ之ノ小方ヨリ　蛍ウセ居ヲ柏木ヲ　アセヲ大四ヲ之ノカヨヒヲ

梅里小方ヲ　ヒヲ之ノ　蛍兵ヲ

中ル君　小方ヲ君

本之君　大将ノ人

蛍兵ヲ之　玉ヘ

冷泉院ノ御製

玉

冷泉院ノ御製

玉

原

玉

夜

門

玉ヲ巻ニ桂ヲ梅里ニ　玉ハ梅ノ小方ニヨリテ

通躬公
又三首

沖津船よるへ波路も見えぬかな棹はよるへと頼みかりしを
よるへ浪風のさはらぬ舟もなしおのか思方に漕はなるとも

梅の花　寛文三十九正二月ノイアリ

種成院
花の香はちりみえて流るゝ水とも梅の袖よ深く匂ふや

源保し
梅か枝よりみんと思ふ人のとめし香とはつくめと

愛宕上卿
鶯あへて見えやらぬつく遠しへんとあつる花のあたりに

源
見しも香もうちけちに雲の花さく宿やかせあら

柳本
鶯の袖くつの枝しはひくまで移りきと生かの節

又三首
宰相中将
人あつて風のよくめる花の木にもあかすて吹やよる年

参議中将　柳ノ井
霞おほろ月と花とも香にて風は袖くて薫る人はこれはかす

愛宕上卿
花の香を見えつる袖より梅の色くるあやまちといやとめし

源
めつらしと梅の人てはむそをも花の縁もさくくもるさま

又三首
流すさいしつ世の色よなうれしと思ふ人の宿のあなを知る

中院中納言
聞すゆとくまれは暮れきれとつくしこや世もかなにくん伝

花のうつろふ　寛文三年九ノ三月ヨリ十月ニ至リノイアリ　此キ二太上天皇ニナリタマフ

内大臣
うつる花の枝の色ニたちまち遠ノかけや八ニ思春の名残て

メ

内大ト

メ

拾遺

メ

ヒ

メ

右内侍

メ

中納言

左衛門督

メ

ヒ

内大ト

メ

内侍

メ

ヒ

以　太政トニナリのよ

紫の雲にまかへる菊の花にこりなき世の星かとそ見る

朱雀院御製
秋をへて時雨ふりぬる里人もかゝる紅葉のおりをこそ見ね

冷泉院御製
よのつねの紅葉とやみる古しへの例にひける庭の錦を

わかな上　源氏三十九ヨリ四十ノ春ニ二テアリ

秋好中宮
さしなから昔を今につたふれは玉の小くしそ神さひにける

朱雀院御製　やし　廿一二年二流レシヲロヒ字よ
さしつきにみるものにもか万代をつけの小くしの神さふるまて

玉　内侍督君卜云
若葉さす野への小松をひきつれてもとの岩ねをいのる今日かな

源
小松原末のよはひにひかれてや野への若菜も年をつむへき

紫
目にちかくうつれはかはる世中をゆくすゑとをくたのみける哉

源
いのちこそたえめたえめさためなき世のつねならぬ中のちきりを

同　廿三云へ
中みちをへたつるほとはなけれとも心みたるゝけさのあは雪

女三ノ宮やし　源氏三十ノ御女君直卜云　朱雀院ノ三女
はかなくてうはのそらにそきえぬへき風にたゝよふ春のあは雪

朱雀院御製
そむきにしこの世にのこるこゝろこそ入山みちのほたしなりけれ

紫　女三ト紫トハイトコナリ
そむく世のうしろめたくはさりかたきほたしをしゐてかけな離れそ

源
年月を中にへたてゝあふ坂のさもせきかたくおつる涙か

朧月
涙のみせきとめかたき清水にてゆきあふ道ははやくたえにき

原 勢 笠 原 摩 節 明石上 明石入道

[illegible]

老の波うちよる浦とこそ聞しかど
[illegible]
[illegible]
世を捨てく明石の浦にしほたれ
[illegible]

柏 夕 大将 柏 小侍従

[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]

柏 中納言 柏ノ小方ハ女三ノ姫君ノ事 実説後一条ノ御息所トハ云落葉宮ノ事

原 大尼

[illegible]
[illegible]
[illegible]

明六

笠

落葉

中務卿

柏木

女三の宮

柏

川

[illegible]

笠

原

女三

原

[illegible]

原

[illegible]

[illegible]

廿三ノ

[illegible]

柳又

[illegible]

原

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

あきくれぬ　夕
ふるゆくしぐれの雨よりそはもつて屋をもうきうとうとうと

なるゝ方をうらゝ、むらの海士の海士衣ゝ見もやうゝ

松ゝ子共海のわれ衣ゝ見ぬゝ人ゝ見ぬゝ人ゝ見ぬゝ

望ゝあまや衣をんゝ

たゝ浦の世ゝりゝ

数なゝ方ゝ法ゝ海ゝ世ゝ

人ゝ世のうきを衣ゝ

こゝろ

おゝゝ思ゝ方なゝゝ

こゝろ

こゝろゝ

ゝ世ゝ

ゝ

ゝ

原

原

原

原

原

原

原

原

原

原

原

原

原

原

原

原

原

夕べ

ほとゝぎすの花橘にしてちりつゝ
ほとゝぎすとなきてこゝろ
よるとしたがへてみてくれき
七夕ぬ
君こゝろ
人こゝろ
大こゝろ

原　門　門　門　門　門　原　中あり

原　門　門　門　門　門　原

人こゝろ
ほとゝぎす
ほとゝぎす
ほとゝぎす

華陽信夕

雲のこれ

[illegible]

二ゝ梅

[illegible]

竹川

[illegible]

妹君　玉の女房

ゆめもるこゝろ　ハなれ　きゝ　枝なりうつる　梅の花をそこにはなれや

大姉君　姉君の女房

ありて　池の　汀　ゆ　高き　花　あ　て　成て　乱るゝ　ハれ

妹　童女

あ　月　花　ゆ　もる　こと　て　橘　花　の　ゆ　ゝ　かゝ　つ　て　る

姉　童女ナレキ

橘　花　匂　ゆ　ゝ　に　ち　に　ち　ゆ　ゝ　と　ち　ゆ　ふ　計　れ　袖　ゆ　ゝ　や

菫

清　ゆ　て　る　る　月　日　と　か　る　く　つ　る　ゆ　ゝ　き　ゆ　ゝ　著

かゝ

ハ　ゝ　や　る　枝　な　る　ゆ　ゝ　ゆ　に　る　ゆ　ゝ　ハ　ま　け　れ　ん　ら

ゆ　れ　姉君の女房

ま　ち　な　ゆ　や　ま　き　ま　ま　ん　ま　ち　ま　け　を　ん　ひ　る　ま　ま　ま　ま

かゝ　又

ゆ　ゝ　く　ま

かゝ

玉　ゆ

花　ゆ　み　く　春　ゆ　ら　ゆ　ゆ　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま

姉君

ま　ま

かゝ

ま　ま

菫

ま　ま

有仏君

ま　ま

姉君の女房　冷泉院（姉君ニ子リの中ニ女ニノ宮又若君ハ右大臣ノ子）

ま　ま

菫

ま　ま

桐壺

源氏ヲ桐壺帝夫人ノ宮ニ宿ハリリノ事トモ云

八文字 婦作

打すてゝ行にしかたに水なれさせよとなれ級

いつくにかとゝまりぬらんと思ふにあるかなしさ

中之 なくしもとゝまりぬらんと思ふにあるかなしさ

八文字 みしかも宿とかりとゝ思ふにあるかなしさ

冷

八 世とゝもにかゝるかなしさ

八文字ハ八文字冷泉院ハ十ノ文字ニハ一ツトシテ入ナリ

蓋 なくしもとゝまりぬらんと思ふにあるかなしさ

中而云 なくしもとゝまりぬらんと思ふにあるかなしさ

蓋 物思ふ者の家にしてみるに尋ぬる松のとゝ山の芳蘭

蓋 物思ふ者の家にしてみるに尋ぬる松のとゝ山の芳蘭

蓋 物思ふ者の家にしてみるに尋ぬる松のとゝ山の芳蘭

物

白
[illegible]
[illegible]
[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

芝 竹 白 中

さう花さてなまれとハ花とかけうハけ
ろ〳〵なきんくろハからなれ独とハ
中さん物ゝなくゝ橋姫のかくさる袖歩ゝ
さてせれもそのまあやゝ宿橋のけるなまほと
ハけるゝ花のゆるよひるみし本ゝとゝ秋ゝ
中四て 橘ゝそ巻ゝ咲ゝ物ゝ
芝 ハけこら秋ハ物ゝ
ゝ月ゝへゝきゝ山ゝの岩きゝんゝけゝ

白 門 文 中 芝 中四 芝 小

秋けゝきゝ物ゝ
ゝ月ゝ物ゝ
ゝ物ゝ秋ゝ
あゝまゝゝ星ハ
ゝゝけのゝ
時の雨ゝけゝ
かゝゝ白けゝ
ゝ物ゝ

[illegible]

立隠るゝ[illegible]ゆゝしきまで心も沈たる

[illegible]

[illegible]

[illegible]

左大臣
今ひとり

中宮

菅

なとりき

菅 桂殿にて

帝

菅

菅

中

菅

中

中宮

梅壺女御

菅

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

法
白
法
白
法
白
業
法
白
業
法
白
法
白
業
法
白
法
白
業
法
白
法
白
業
法

[illegible]
[illegible]
[illegible]

蓋

句

蓋

少将如明之弓之人蓋ノ人々

蓋之々

門

一品ノ宮ノ二ツ目

萩の葉ふき結ひ結ひ

門

一品宮ノ御方

女房ども

花と人々ふるなれば女房ども多みれやいかに

矢ノ方モト

撫子の女房ども花雪ふりつる

蓋ノ々

門

前ノ方ハ一よ袖ふるまふ大ふれふるふうつれ人々

ホラヲ吹アマノ子トヤ申シ吹キ二カクレ系カヒラフノ子ノ子トアリ

あるとみるもあるとみれすれ人々いかにもいかに

てなるし

宿敵 長野ノ者トモ

門

月なりけし明の月の早き別れを思ふ人々

中ノ方 居君ノ女ノ人々

月なりてうき世の中あるとて世ハ人の月の影

あるとみれ月なるしるる女房ども月ゆゑ遠ざかる

[illegible]
松出れば[illegible]と思ひきこえ[illegible]
秋はぎの[illegible]
[illegible]
山の[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]

[illegible]
[illegible]
[illegible]

こうしは吹かぜ山の麓にハ立つる白きうけるあれのき
まつ人とあるしと云心里のことをとつて形をさらき
あるこの世をそむきあるれいとふかぜくあるこそ
かさくるは雨山の雪れたるあてしふりけることを出
山里の雪ふれつてはやし形ひさきはのまつ氷
雪降き雨の雨雪とわかるあるとこそつむき
神垣の人ゑをかねと白雪春の明の
ら人ゑけと云あるはとあるもちふ問いく世きあは

あり衣の雪ふるあるみの袖とかけてみん

若はうき枕

はのしとあるあるまつあるこの山あふきまふ
ふの雪のあるし

相賢記